

明治期における獣医育成機関としての青森県農学校
(畜産学校)
- 「富国強兵」策が名馬の産地にもたらした繁栄と矛盾 -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20923

明治期における獣医育成機関としての青森県農学校（畜産学校）
－「富国強兵」策が名馬の産地にもたらした繁栄と矛盾－

史学専攻
堀内 孝

1 問題意識と目的

「富国強兵」は、幕末から明治にかけてとなえられた、近代日本の建設をめざすスローガンである。具体的には、重工業や軽工業のみならず、農業をふくむ産業の近代化をはかり、それを基礎として軍事力を強化しようとするものだった。目的を達成するためには、馬政、つまり軍馬、農耕馬、あるいは輸送馬として、馬の果たす役割が重要であり、同時に、科学的な知識と技術をもつ獣医が大量に必要となった。そこで、中等教育機関であるはずの農学校の一部が育成機関とされたのである。

そのひとつとして開校した青森県農学校（畜産学校）は、1898（明治31）年、三本木村（現在の十和田市）に設立された。三本木村は、戊辰戦争に敗れ、会津から下北地方をへて移転してきた元斗南藩士と、三戸から入植してきた農民たちが切り開いた開拓の村だった。敗者としての明治を歩まざるを得なかった彼らにとって青森県農学校（畜産学校）は、村の発展に欠くことのできないものだった。

本論文は「富国強兵」策のなかで、かえりみることの少なかった馬政と、獣医が果たした役割の重要性、獣医を輩出し続けた青森県農学校に注目する。名馬の産地、明治期の三本木村に光をあてることで、日本近代史の空白の一部を埋めることが本論文の目的のひとつである。

一方で本論文は、軍馬改良や獣医育成、農学校の設立などにかかわった陸軍、農商務省、文部省、宮内省あるいは村の指導的な立場に立った元斗南藩士ではなく、日本の馬政を最底辺でささえた馬小作などの馬産農家に注目した。彼らは、中央による政治的、経済的支配が生み出した矛盾にさらされることになった。この矛盾について検討することが、ふたつめの目的である。

2 構成及び各章の要約

本論文は、第1章から第6章の本論によって構成されている。第1章「青森県農学校設立の背景」では、1898（明治31）年、青森県農学校が三本木村に誕生した背景を、様々な角度から検討した。

明治以降の三本木村は、名馬の産地としての発展をめざしていた。「富国強兵」策がもたらした軍馬改良、畜産をふくむ農業など産業の近代化、日本人の生活様式の変化などは、三本木村など青森県南部地方にとって大きなチャンスだった。同時に、大量に求められた獣医が、圧倒的に不足していたため、農学校が注目されることになった。なぜ中等教育機関が期待されるようになったのか、その背景と、馬小作など産馬業の発展が、繁栄と同時に経済格差という矛盾をもたらしたことが明らかにできた。

第2章「青森県農学校の開校と課題」では、実業教育に対してそれほど積極的ではなかった文部省の姿勢の変化や、三本木村の有志による農学校の誘致運動について検討した。文部省は、1893（明治26）年の実業補習学校規程を皮切りに、ようやく実業教育の法的基盤を整備していった。

こういった状況のなかで、元斗南藩士河村碌村長を中心とする三本木村の有志によって、農学校の誘致運動が行われた。馬と同時に人も育てようとした河村村長は、誘致に成功し、仲間とともに万歳を唱えたが、辛酸を重ねた元斗南藩士にとって、農学校が村発展に必要な不可欠であると考えられていたことが明らかとなった。

第3章「青森県農学校（畜産学校）の発展」では、開校後の青森県農学校（畜産学校）が直面した様々な課題とその克服について検討した。初期の青森県農学校（畜産学校）が、校舎などの施設、設備が不十分だったこと、教職員の異動が頻繁で安定しなかったことに加え、志願者もなかなか集まらなかった。

これらの課題は、人材育成や学校がもつ専門性を生かした地域貢献、教職員の待遇改善によって、徐々に改善されていったが、畜産学校が充実期を迎える決定的要因となったのは、日露戦争だった。当時すでに、卒業生に与えられる獣医免状、一年志願兵などが特権として認められるようになっていたが、日露戦争前後から、獣医を志す者が増え、ようやく定員を満たすことができるようになった。このことは、青森県農学校（畜産学校）が軍馬改良をになう獣医育成機関として、戦争と強く結びついていたことをあらわしている。

また畜産学校には、東北だけでなく関東、北陸、九州、さらには韓国や中国からも生徒が集まってきた。この背景には、軍馬補充部三本木支部との協力関係や、豊富な実習の機会など、馬産地という恵まれた教育環境が要因となっていた。一方で、名門校としての発展を実現しながら、地元貢献する卒業生が少ないという矛盾をかかえ込んだことが明らかとなった。

第4章「青森県農学校獣医科（畜産学校畜産科）の制度と教育」では、学校規則と『青森縣學事年報』をもとに、その制度や教育の内容について検討した。開校当初は、入学資格について16歳以上としていたものを、翌年には14歳に引き下げ、さらに中学校からの転校を希望する生徒を対象に、学力試験も行われることになった。これによって、高等小学校との接続と、中学校からの進路変更がしやすくなったといえる。

教科課程については、設立直後は教職員の数が足りず、わずか週20から21時間の授業しか開設できなかった。実業教育費国庫補助法に規程されている27時間をクリアして、28時間になったのが開校の半年後、全学年が30時間になったのは、1902（明治35）年度からだだった。

また当時の農学校は、普通科目の割合が大きくなる傾向にあったが、各地の農学校獣医科は、あくまで専門科目重視であり、とくに最終学年になると、授業のほとんどが専門科目になった。3年で獣医として開業できるだけの知識、技術を身につけさせなければならない当時の状況について、明らかにすることができた。

第5章「青森県農学校（畜産学校）の学校生活」では、卒業生の著作、記念誌のインタビュー、座談会、新聞記事などから、明治期の服装、食事、学校行事、授業の様子など、学校生活の一端を描き出し、全国から生徒が集まってきた要因、三本木村など青森県南部地方にもたらされた矛盾について検討した。

なかでも、国会議員となった鈴木一司と野溝勝の発言に注目した。獣医をしていた友人のすすめで、1912（明治45）年水戸中学を中退し、茨城から三本木村にやってきた鈴木は、三本木支部との協力関係や、自主的に行っていた実習に必要な馬の入手が容易だったことについて、長野出身の野溝勝は、馬小作の厳しい生活について述べている。畜産学校が名門校として知られるようになった要因、名馬の産地にもたらされた経済格差などが、証言の面からも明らかになった。

第6章「高等教育機関の誘致運動」では、高等農業教育機関の誘致運動と畜産学校の専門学校昇格運動、北里大学畜産学部の誘致運動について検討した。畜産学校はあくまで傍系の学校であり、社会の最上層を形成する学校ではなかった。もし、高等農業教育機関が設立されれば、県内の進学率向上や産馬業への貢献が期待できたが、運動が成就することはなかった。

戦後になって十和田市は、北里大学畜産学部の誘致に成功する。軍馬はもちろん馬そのものがほとんどいなくなった現在の日本だが、獣医師の仕事は、ペットの診療、食品衛生、公衆衛生、野生動物の保護など、多方面にわたっており、かつての戦争に奉仕した状況とは大きく異なっている。三本木村の獣医育成の伝統が復活し、現在に引き継がれていることが確認できた。

3 結論

三本木村は名馬の産地として、馬とともに発展した。しかし、「富国強兵」策のなかで重要な位置をしめる馬政は、繁栄と同時に大きな矛盾を三本木村にもたらした。その矛盾は経済格差であり、戦争への奉仕だったということである。獣医が行ったあらゆる行為は、結局は、馬を陸軍の機動力とするためのものだった。しかも戦地に輸送された馬のほとんどは、日本に帰って来ることができなかった。

多数の獣医を輩出した青森県農学校（畜産学校）は、県立学校でありながら県外や国外の出身者を多数受け入れることになった。しかし一方で、育てた人材の多くが村を出て行く矛盾をかかえることになった。

青森県南部地方には、馬の蕃殖や種付けを担当する種馬牧場、種馬所、軍馬の調教や各部隊への配布を担当する軍馬補充部三本木支部などがあり、馬政の最前線だった。そのなかで青森県農学校（畜産学校）も、重要な役割を果たした。本論文は、獣医育成を担当した青森県農学校（畜産学校）を検討することによって、「富国強兵」策が名馬の産地にもたらした繁栄と矛盾を明らかにすることができた。